

サイエンスカフェの概要について（事後報告）

1. 開催日時：令和元年9月19日（木） 20時30分～22時30分

2. 開催場所：Shot Bar 周太郎（大阪府豊中市曾根西町3-5-33）

3. 関係団体等：なし

4. 役割

コーディネーター：中村征樹（大阪大学准教授・日本学術会議連携会員）

ゲスト：堤 亮介（大阪大学大学院文学研究科大学院生）

5. 概要：

今回のサイエンスカフェは、「古代ローマの公衆浴場とローマ人の健康」をテーマに行われた。

まずゲストからは、古代ローマで公衆浴場は文化的にどのような位置づけにあったか、当時のローマ人から公衆浴場がどのように捉えられていたかについて説明があった。参加者からは、現代とは大きく異なる古代ローマ特有の文化や浴場の規模や構造について、多くの質問が寄せられた。古代ローマの大規模な公衆浴場は、皇帝をはじめとする富裕者によって建設され、当時の庶民にとっても十分に利用できるほどの料金で提供されていた。公衆浴場は単なる入浴施設ではなく、重要な交流の場であり、ときには多様な社会階層の人々が交わったと推定されている。また浴場やその付属設備では運動や歌、軽食なども楽しまれていた。このように、古代ローマの公衆浴場は当時の人々にとって重要な娯楽の場であり、またコミュニティの維持・形成に重要な意義を持っていたという。

次に、古代ローマの公衆浴場と人々の健康についてのゲスト自身の研究が紹介された。公衆浴場内で医療行為があったかどうかは定かではないが、当時のローマでは入浴療法が流行しており、また、浴場内には医療の神や女神の像が存在したなど、公衆浴場と医療・健康が何らかの形で関係していたことが推測される。ただし、国家としての古代ローマは、疫病のような国家的混乱をもたらす事態以外には市民のプライベートに干渉しない傾向があった。古代ローマは、当時頻発していた疫病への対策に関心はあっても、人々の健康に関心があったとは考えにくい。また、古代ローマの公衆浴場は、皇帝や貴族などの私的な施設であり、国家的な意向によるものではなかったと考えられる。これらのことから、ゲストは卒業論文で、古代ローマの公衆浴場は建設・運営者の人気取りのためのものだったと結論づけた。しかしながら、ゲストは近年の研究で、古代ローマにおける「パブリック」の特殊性を考慮して、異なる結論を導こうとしているという。公衆浴場で用いられている水が究極的には皇帝の財であるのと同様に、古代ローマにおいてはさまざまなインフラストラクチャーや歓

楽が、施与慣行によって維持されていた。その中で、公衆浴場を通して市民に健康というものを提供していたことは、「オフィシャル」ではないが「パブリック」な行いと言えるのではないか。ゲストの研究紹介がひと段落した後も、古代ローマと日本の比較などをめぐって議論が盛り上がった。

歴史を学ぶことは、単に知的好奇心を満たすだけでなく、現代的な課題を考察する際の助けにもなる。今回のサイエンスカフェでは、「古代ローマの公衆浴場とローマ人の健康」というテーマを通じて、健康、医療、清潔と不潔、公衆衛生、プライベートとパブリック、為政者と市民の関係性などについて考えるよい機会となった。

6. 参加人数：

講演者等：3名

その他の参加者：8名

7. 特記事項：

会場となった「Shot Bar 周太郎」には、サイエンスカフェの趣旨に賛同いただき、参加者に1ドリンク以上の注文をお願いすることで会場を無償で提供いただいたほか、常連客へのイベントの告知にも協力いただいた。また、ゲストのドリンクについてサービスしていただいた。